



Title	北方文化研究室. 一 北方文化研究室の開設とその活動. 二 戦後の状況と閉室
Citation	北大百年史, 部局史, 1377-1384
Issue Date	1980-03-20
Doc URL	http://hdl.handle.net/2115/29995
Type	bulletin (article)
File Information	bukyokusi_p1377-1384.pdf



[Instructions for use](#)

北方文化研究室

目次

一 北方文化研究室の開設とその活動	1380
設置の経過―資料の収集―研究室の活動	
二 戦後の状況と閉室	1383

一 北方文化研究室の開設とその活動

設置の経過

一九三七年（昭和一二）六月、上原（農）、犬飼（農）、児玉（医）の三教授は、時の総長高岡熊雄に直接な関係を有するにもかかわらずこれまで適当な研究機関を欠いていたこと、本学は北方文化の研究上天与の位置にありすでに研究業績も少なくないこと、研究資料の収集を急ぐべきことなどであった。北海道農業経済の権威であった高岡総長は自らも早くから北方文化研究機関の必要を痛感していたので、学内に機関設置の気運が高まるとその実現に努力し、同年十月十三日には北大達第一八号をもって「北方文化研究室規程」が制定された。

北方文化研究室の最初の主任には、当時図書館長をしていた上原徹三郎が就任した。委員は各学部から選出することになり、農学部は大飼哲夫、医学部は児玉作左衛門、工学部は鷹部屋福平、理学部は鈴木醇がそれぞれ委員となったが、いずれもその専門分野で著名な学者たちであった。このほか創設の当初から司書官の柴田定吉と高倉新一郎（農学部助教教授兼務）が囑託として研究及び管理に従事した。

この研究室の組織上の特徴は、専任の研究員をおかず、北方文化に関心を有する学内諸学部の研究者に広く門戸を開放したことである。それはこの室を共同利用施設として、各分野の研究者による北方文化の総合的な研究を図ろうとする当時としてはまことにユニークな試みであった。その研究テーマの中に北方文化史や北方民族、北方産業などがとりあげられたことは、自然科学に偏っていた北大の欠陥をこの研究室によって補おうとする目的をもっていた。



北方文化研究室の創始者たち
前列左から鷹部屋、上原、兎玉、
後列左から高倉、柴田の諸氏

北方文化研究室の建物には図書館に隣り合った旧昆虫学講堂が建てられた。これは札幌農学校時代に建てられたもので、一九三六年農学部新館の落成により空室となっていたものである。旧標本室は今や資料室となり、前面の三室が研究室となったが、事務や清掃のため各一名の雇員が採用された。

研究室は学部には属せず総長に直属していたため、予算は本部経費の中から支出され、初年度は経常費・臨時費合計二五〇〇円であった。しかし次年度からは毎年一五〇〇円に限定され、研究報告の刊行費は別途に配分された。予算の用途は人件費・備品費・事務費・図書費のほか、委員や研究者に配分される研究費が過半を占めていた。

資料の収集

北方文化研究室設置の目的の一つは研究資料の収集であったが、その核となったのは札幌農学校以来図書館に蓄積されてきた北方関係の図書・写本・地図などの資料である。研究室が設立の当初から新しい資料の収集に非常な熱意を示したことは、「設立の理由と其の事業の概要」に述べられた次の一節からも知られることができる。「将来は、北方事物に関する総ゆる資料を蒐集整理して本学を以て資料の保有に於ては第一位のものがたらしめ、資料を本学に求めて得られざるものなしと云ふ域に達せんことを期待せり」。その第一の着手は、北海道庁の「北海道史編纂掛」が多年の歳月をかけて収集した史料の寄託要請であった。道庁の史料収集は明治末年から始められ、一九三七年には『新撰北海道史』全六冊の刊行を終えたばかりだったのである。道庁では残された貴重な資料の散逸を防ぐためもあって、快くその要請に応じ、同年十一月道庁と北大の間で寄託書がとり交された。

寄託を受けたのは、写本・図類・写真など七〇〇〇点以上

で、かけがえない貴重な資料を多数含んでいた。ここに特記しておくべきことは、寄託条件の中に、「支障ナキ範囲ニ於テ一般研究者ニ之ヲ利用セシムルコトヲ得ルモノトス」の一項が加えられたことである。そのお蔭で学外の一般研究者にも研究室の資料を公開する好ましい伝統が生まれたといえる。

新規資料購入の重点は、北方地域の古地図や写本、北方関係洋書の収集におかれた。研究室の図書費は年間数百円にすぎなかったけれども、予算の不足分は図書館で購入し、また北方文化の研究に好意をもつ有志者からの寄付によって、まとまった資料が購入された。たとえばアチック・ミュージアムの渋澤敬三は一九三九年（昭和一四）に地図購入費として一〇〇〇円を、また一九四五年にも「北海道殖民地撰定区画図」原本一八五枚その他の資料を寄贈し、桑田権平も一九四二年に現金五〇〇円のほか平沢屏山の「蝦夷人種痘之図」の正確な模写図を贈った。一九三八年には北海道史研究の創始者であった河野常吉の旧蔵書の中から図書二〇五冊、書画二四点、写真五八枚その他が寄贈され、このほかにも貴重な資料の提供が少なくなかった。また研究報告が刊行されると交換による資料の受入れも始まった。

研究室の活動

北方文化研究室の第一回例会は一九三七年（昭和一二）十二月九日に開催されたが、この席で「研究室の方針として」「積極的ニ宣伝ヲ行フ等ノコトヲ差控ヘ先ヅ第一ニ相当ノ研究業績ヲ挙グルコトニ努力」することがとりきめられた。このことは研究室の設置が「根本的・科学的研究」に重点をおき、満州事変以後の時流や国策とは無関係であったことを示している。しかし「北方」の範囲には日本北方ばかりでなく、広く北太平洋圏やシベリアをも含んでいたので誤解もあつたらしく、設立早々に月寒第二五連隊から「シベリア北地の農学・工学・風土・生物・民族」について講演依頼があつたほどである。この意味で研究室が学内措置の研究機関にとどまつたことは、その後のとらわれない研究のためには幸いであつたといえる。

研究室の活動としては研究報告会や紀要の刊行があった。第一回の研究会は非公開で行われたが、次回からは公開となり、またマンロー博士やフーベル師などの特別講演、エカシ菊池氏の熊の解体実演なども行われた。『北方文化研究報告』は一九三九年三月から年二回発行され、戦局悪化のため一九四二年の第六輯をもって一時休刊したが、そこに掲載された論文はいずれも独創性にとむ力作ぞろいで、このことが北方文化研究室の声価を著しく高からしめたのである。

研究室が創設の当初から世間に注目されたことは、この室を訪れた人々の多彩なことからも知ることができる。恐らくは北大を訪れた各界の著名人の多くがこの研究室を訪れたものと思われ、特に夏期には委員たちの応待と案内はたいへんなものであった。このために古地図や貴重資料を並べた展示室が設けられ、来訪者に研究室の存在をさらに印象つけた。

二 戦後の状況と閉室

北方文化研究室にとって戦後の重要なできごとは、一九四七年（昭和二二）に北大最初の文科系学部として法文学部が誕生したことであった。戦前の北大は自然系大学であったとはいえ、これまでも農学部の高倉助教授が北海道の経済史・植民政策史や地図史を、理学部の名取助教が考古学を、服部講師がギリヤーク語を、また研究室の嘱託知里真志保がアイヌ語・アイヌ文学を研究していたが、今や北方文化について人文社会科学分野の総合研究の可能性もあらわれたのである。一九五二年には『北方文化研究報告』も復刊し（第七輯）、一九六五年まで毎年一回刊行され

ることになった。ちなみに終刊第二〇輯当時の委員を示せば次のとおりである。

主任高倉新一郎（農）、委員名取武光（理）、横山尊雄（工）、鳥山成人（法）、林善茂（経）、伊藤昌一（医）、大場利夫（医）、佐々保雄（理）、阿部武彦（文）、鈴木朝英（教）。このように研究室は戦前と同様に全学的組織であり、資料も学内研究者ばかりでなく、広く他大学や一般の研究者にも公開されていた。

しかしながら制度的にみれば、北方文化研究室は相変わらず学長に直属する学内措置の機関にすぎず、予算・雇員もしだいに縮小され、建物でさえ一九五五年には新設の法学部スラブ研究所に譲り渡して農学部へ、次いで図書館新館に間借りすることになった。このようにして研究室は、その末期には資料のほか事務・施設・備品・消耗品に至るまで図書館に負っていたのである。

研究室を制度上の機関とする要望は早くからあったが、その性格上これを全学組織の研究所とすることには種々の困難があつて実現しなかつた。それゆえこの要望は、北大に欠如する考古学・民族学講座を補充する研究施設の設置を目指して行われ、一九六六年文学部に「北方文化研究施設」の付置が認められた。これをもって旧研究室は新しい研究施設の今後の発展を期待しつつ、三〇年にわたるその活動に幕をおろしたのである。

北方文化研究室の閉室後、その資料はすべて図書館に引き継がれ、一九六七年六月にはこれに図書館所蔵の北方関係資料を合体して「北方資料室」が設置された。さらに翌年四月には図書館と文学部による「北方資料室運営委員会」ができて、この室の充実に努めることになり、文学部からも旧ユーラシア文化研究室（北方文化研究施設の前身）の蔵書の一部が管理換された。このようにして「北方文化研究室」の主要な目的の一つであった資料収集は、図書館の「北方資料室」によって受け継がれたのである。一九七〇年には、旧北方文化研究室が戦前に北海道庁から寄託を受けた資料の大半も、図書館に「永久寄託」されることになった。

（秋月俊幸）